

なかもと

中本たか子

下関市
(1903～1991)



【著作】
『白衣作業』（昭和13・六芸社）
『南部鉄瓶工』（昭和13・新潮社）
『近代女性作家精選集』（平成11・ゆまに書房）
ほか

中本たか子は山口県角島の生まれ。山口に移り、県立山口高女を卒業後、数年間、県内三カ所で小学校の教員を勤める。小説家になるため、昭和二年（一九二七）上京。働きながら文学や哲学の勉強をする。最初に彼女の才能を認めたのは、新感覚派作家の横光利一であった。
横光の感化を脱して、プロレタリア文学に接近したのは、女性解放を目的に発行していた長谷川時雨主宰の女流文芸誌『女人芸術』に参加してからである。同誌に「赤」ほか話題作を発表。先輩・同輩に田代文子、林美美子、壺井栄らがいた。
二十七歳という若さで、一流雑誌の『文芸春秋』『新潮』『改造』に作品が掲載され、広津和郎をして「すでに一家をなしている」と将来を囑望された。
このころ地下にあって非合法活動を始めた、昭和五年（一九三〇）、共産党のシンパとして検挙される。一度はひどい拷問によって神経を痛め入院。昭和八年（一九三三）、再び検挙され実刑四年の判決で翌九年から服役。恩赦で一年早く昭和十一年（一九三六）に出所。以後は、国策に協調したと見られる。
『白衣作業』『南部鉄瓶工』『耐火煉瓦』などスケールの大きい作品を書く。昭和十六年（一九四一）、蔵原惟人と結婚後は、厳しい言論統制から身をかわすように、古典の研究にいそむ。
戦後は、わが青春、といっても獄中での生活や行を共にした同志らの人間模様を回想したドキュメントを書き注目される。
中本たか子の世界を一貫してきたのは、一種の正義感であろう。社会的弱者への同情、権力への反抗。ハードな面を持ちながら、人間として、極めて誠実な人柄であった。
(文・和田 健)

静と動のふるさと
中本たか子
人間の生命をかんがえてみると、不思議な気がします。年とつてくると、しだいにふるさとを思い出すようになりますね。
ふるさとの山に向かいて言うことなし
ふるさとの山はありがたきかな
この石川啄木のうたは、まことによく、真実をうがっています。高き山と低き山と、ふるさとの山は泰然としてそびえ、有名無名の歴史をながめてきました。そして、このふるさとの山は永遠なる母のふところのように、人間の誰をも、あたたかくむかえてくれます。こうした山々にめぐまれた山口は、静かに思索する精神風土を、おのづからそなえていると言えましよう。
わたくしは若いころ、この静かで、社会の発展がよく見えないよう、山口からとびだしました。そして、そのころの浪にのって、さまざまなきことをしたり、又は、激浪が頭からうちかかってくる、はげしい運命の明暗をたどったりしました。
今、年とつて、折にふれて思いますが、まず、山口の周囲の山々の美しさ、きざんとしてゆるがないその態度です。朝もやのなかに浮かぶ姫山、夕ざりにかすむ兄弟山などの美しさや、鴻の峯、方便山などの高い山々の偉容などは、歴史上の人物よりも、よりたしかなものをもっています。
(後略)
(和田健氏宛て書簡より)



生誕地（角島）に建てられた文学碑

中本たか子 年譜

(提供・和田 健)

明治36（一九〇三）年	一三歳
大正5（一九一六）年	一三歳
大正9（一九二〇）年	一七歳
大正10（一九二一）年	一八歳
昭和2（一九二七）年	二四歳
昭和3（一九二八）年	二五歳
昭和4（一九二九）年	二六歳
昭和5（一九三〇）年	二七歳
昭和9（一九三四）年	三一歳
昭和13（一九三八）年	三五歳
昭和16（一九四一）年	三八歳
昭和32（一九五七）年	五四歳
昭和36（一九六一）年	五八歳
昭和48（一九七三）年	七〇歳
昭和61（一九八六）年	八三歳
昭和63（一九八八）年	八五歳
平成3（一九九一）年	八七歳

11月19日、山口県豊浦郡角島村（現・下関市）に生まれる。本名タカ子。父は幹雄。下士官出身の陸軍中尉で村の収入役を勤めた。母はユキノ。たか子は6人兄弟の長女。
3月、角島尋常小学校を卒業。六年間を通し学業全甲の成績であった。子女の教育のため一家で山口町大字後河原（現・山口市）に移る。県立山口高等女学校を卒業（第二十回卒業生）。検定試験で小学校尋常科正教員の資格を取る。
12月、下関・王江小学校に勤務。次いで14年6月、山口・下宇野令小学校、15年3月、嘉川興進小学校に勤務。
4月、家には無断で友人と上京。働きながら文学に精進。当時の新聞に菊池寛の招きによるとある。
横光利一の推薦で『創作月刊』4月号（文芸春秋社）に短編「アポロの葬式」を発表。作家生活の第一歩を踏み出す。
長谷川時雨主宰の女流文芸誌『女人芸術』に参加。「赤」ほか発表。
『新潮』『文芸春秋』『改造』等に作品が掲載される。この年、小説集として『恐慌』『朝の無礼』『闘ひ』など3冊の単行本が相次いで発行され、プロレタリア作家としての地歩を築く。しかし、非合法活動により、二度も検挙される。
共産党員ではなかったが治安維持法違反事件により、3年の獄中生活をする。この体験をテーマに昭和12年『白衣作業』を『文芸』に発表。芥川賞候補となる。
長編『南部鉄瓶工』を『新潮』2月号に発表。
5月、プロレタリア文学運動の理論的指導者だった蔵原惟人と結婚。戦時下、言論統制の時期は古典に親しみ、紫式部に関する小説的伝記を書く。
砂川基地拡張反対事件をテーマにした長編小説『滑走路』を10月から翌年5月まで『アカハタ』に連載。ソ連や中国でも翻訳される。
新島（東京都）のミサイル試験場設置反対を支援。のちに長編小説『まゆ咲く島』として出版。
若き日の闘争と青春を回想した『わが生は苦悩に灼かれて』出版。版を重ねる。
『私の戦後平和運動史』として回想ドキュメント『広島へ：そしてヒロシマへ』出版。
短編小説『とべ・千羽鶴』出版。日本民主主義文学同盟の機関誌『民主文学』に発表した作品を収める。
9月26日、埼玉県三郷市内の病院で死去。



中本たか子文学資料館入口と中に展示された著作（下関市豊北町角島）

